

E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（１）：カー 著伝記『ドストエフスキー』に関する分析

河村，しのぶ
元九州大学大学院法学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7183286>

出版情報：総合文化学論輯. 20, pp.37-60, 2024-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（１）

—カー著伝記『ドストエフスキー』に関する分析—

河村　しのぶ

はじめに

本稿は、E・H・カー(Edward Hallett Carr, 1892-1982) の 1930 年代の思想において、人間の理性の可謬的性質こそが、この時期のカーに一貫して、肯定的に擁護されてきた視点であることを明らかにすることを目的とする一連の研究のうちの第一段階として、カー著『ドストエフスキー』(1931) を分析する。この、人間の理性は可謬的性質を有するというカーの視点は、彼がロシア人の知識人たちを中心とする伝記作品を執筆する過程の研究で認識した、人間の理性に対する過信への危惧を起源としている。

拙稿河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b においては、カーの 1930 年代の知的営為に一貫する否定的かつ批判的視座とは、超越的な原理に基づく知識形態であったことを明らかにした。

すなわち、人間の思想は時代や置かれた場所により制約を受けるというカーの主張を、彼が 1930 年代に著した四冊の伝記作品すべてと、彼を国際政治学の祖と世に認識せしめた¹、この学問領域の古典『危機の二十年』(1939) をテキスト分析することで論証した(河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b)。

本稿は、逆説的にカーが 1930 年代に肯定的に擁護したものについての研究であり、上記の拙稿四論文の続編に該当する。そして、上述のように、カーが擁護したものこそ、人間の理性の可謬的性質である。

カーは『危機の二十年』(1939) において国際政治学を打ち立てることを試みた際に、ユートピアニズムとリアリズムを並置し、古いユートピアニズムはリアリズムに対照され破壊されたのちに、新しいユートピアニズムが築かれる必要性を説いた(Carr 1939, p.118: カー 2011、190 頁)。

カーによるこの議論方式の起源を本稿は、カーの著した伝記作品群の研究過程に求める。すなわち、この伝記作品群研究期間にカーは人間の理性は、誤謬をはらむものであり、理性に対する過信への危惧を募らせていったと本稿は考えるのである。

そしてこの人間の理性の可謬的性質こそが、ユートピアニズムに対してリアリズムを

¹ カーが国際政治学の祖であるとする説に関しては、異論もある。Lucian Ashworth などによって、そのような議論は展開されている。

用い、それがいかに現実と合致または乖離しているかを見極めた上で、新たなユートピアニズムを打ち立てる必要性を説くことにつながっていると考えられる。

ユートピアニズムの根幹をなす合理主義的な理想とは理性の産物である。知に依拠する理性とは時代と場所に制約された人間の思想にすぎず可謬的である。可変的かつ仮設的であり、誤謬をはらむ理性の産物としての理想であるユートピアニズムは、したがって即物的現実によって対照されなければ、現実と乖離した夢想と化すことをカーは見出した。

カーのユートピアニズムとリアリズムに関する議論や、ユートピアニズムとリアリズム、それらとカーが認識した人間の理性の可謬性の関係性については、別稿にて詳述することとする。本稿から数稿にわたり、本稿筆者は、その前段階として、いかにしてカーが人間の理性に限界を発見していったかを、ロシア人の知識人たちを中心とする伝記作品の主人公の理想、より厳密に言えば、理想の基盤となる理性の限界をカーのテキストに沿って、カーの描写を追うことにより、明らかにしていきたい。

以上のことを明らかにするために、その第一段階として、本稿はこれより、カーの第一の著作である伝記作品、『ドストエフスキー』のテキストを分析する。マイケル・ラウアー (Michael Lauer) の言葉を借りるならば、カーが多くのを「負う」だけでなく、彼に新しい世界を広げてくれたカーにとっての恩師ともいえるドストエフスキーでさえ、その理性に限界を有していたことについて、カーの描写とその評価を論じていく (Lauer 2005)。

次に本稿の構成を述べる。本稿は序としての「はじめに」に続き、「Ⅰ. 問題の所在」、「Ⅱ. ドストエフスキーと『ロシア民衆』」、「Ⅲ. ドストエフスキーと『ロシアと西欧』」、「結語」の順に構成されている。

以上、本稿の構成を述べた。以下からは、先行研究を検討し、さらに本稿の問題意識について述べる。

I. 問題の所在

ユートピアニズムをリアリティによって打倒し、そののちにこそ、また新たなユートピアニズムを打ち立てる必要がある。この思考の型は、大変多くの異論が想定されるが、カーによる『危機の二十年』において、最も象徴的かつ今日的に重要な視座であると本稿筆者は考える。

なぜならば、この思考の型こそが、現在の様々な国内外の政治的問題を考察する際に、非常に有益な視点となりえると考えられるからである。以下に、例を挙げることにより、この視点の現在における有益性を強調したい。

例えば、ポリティカルコレクトネスが喚起され、多くの議論が巻き起こってから久し

い。ポリティカルコレクトネスの議論は、多岐にわたるが、ある特定のマイノリティーの権利を、これまでマジョリティと考えられていた人々が真摯に再考し、それを遵守しようとするものが代表的であろう。

しかし、ここで一つ考えられなければならないのは、この「理想」はあまりに「理想的」、すなわち「ユートピアニズム」に傾倒してしまい、ことの本質から逸脱しているケースもありえるということである。また、民主主義における寛容さを委縮させていないだろうか。なぜなら少しでも異論、もしくは違和感を持つものは、「差別主義者」というレッテルを張られるため、声を上げることがままならない状態にあるといっても過言ではないように思えるためである。

ここで必要になってくるのが、理想と現実、ユートピアニズムとリアリズムの並置である。それらの相対的な検討こそが必要なのではないだろうか。

本稿の議論からの脱線をしすぎないように、例は一例にとどめておくが、一方があまりに普遍的に善であり、意義を唱えるものは異端者のような扱いを受けるという例を挙げると枚挙にいとまがないように見えなくもない。

このような関心を基に、次に、先行研究の検討に進むとする。カーのユートピアニズムとリアリズムについての批評や先行研究は1939年に『危機の二十年』が出版された直後から現在に至るまで、膨大な数の論考がある。

しかし、なぜカーがユートピアニズムとリアリズムを並置しなければならないと考えたか、その理由についての考察を1930年代というカーが伝記作品群を著した思想形成期に遡って研究しているものは見受けられない。ましてや、その原因を伝記作品執筆のため研究した人物たちの理性の可謬性に着目した論考は他に例を見ない。

他方、カーがユートピアニズムとリアリズムを並置させた点と、両者を「妥協」させたという点に関する極めて手厳しい批判は、1948年にハンス・J・モーゲンソーによる『危機の二十年』の批評がなされたのち、多数現れ、カーの批判者たちの論拠となった。

モーゲンソーは、カーが「政治的状況を概観し、パワーをめぐる現象を批評するための超越した観点を何も持っていない」と論じ、その理由をカーが「哲学的にきわめて備えが不十分である」としてしている(Morgenthau 1948)。このモーゲンソーの主張したカーの「哲学的基盤の欠如」もしくは「哲学的欠陥」はモーゲンソーをはじめとして多くの現実主義者から指摘されてきたことは周知のとおりである。

しかし、彼らの言うところの「哲学」とは、哲学者の使用するところの「哲学」という言葉とは厳密には著しく異なる。彼らの使用する「哲学」とはむしろ「思想」に近い意味を持つものであり、彼らの批判とは、動態的なものを認め、その意味における多様性を認めるカーの姿勢に対する批判であるといえよう。

カーの哲学の有無に対する議論は「哲学とは何か」を、カーや、モーゲンソーをはじめとする他の批評家や本稿筆者本人の立場を比較しなければならないため、別稿にて議

論する必要のある大きなテーマであると認識している。

しかし、カーはモーゲンソーの指摘する通り、「政治的状況を概観し、パワーをめぐる現象を批評するための超越した観点」を持ち、それにより、何か確固たる普遍的な理論や原則を構築することを意図していたのであろうか。

本稿筆者には、カーは理想と現実を並置することによって、相対的に理想と現実を検討し、新しい理想を永続的に刷新することこそ、カーが主眼としたことのように思える。

この仮説の立証には、これから時間をかけて課題として取り組んでいきたい。

したがって、本稿では、人間の知や理想、主にその基盤となる理性の可謬的性質に対するカーの視점에集中する。

人間の知に対するカーの思索を考察したものに、拙稿四論文がある。

それらは第一に、「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として」（以下、河村 2022a）である。

そして、第二に、「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『浪漫的亡命者たち』において」（以下、河村 2022b）である。

第三に「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記『カール・マルクス』における『資本論』に関するカーの議論を基に」（以下、河村 2023a）である。

最後に第四として、「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記作品『バクーニン』における静的な一元性に対する批判的考察」（以下、河村 2023）がある。

これらの論文において、上述の河村 2022a では、カーの処女作『ドストエフスキー』と『危機の二十年』には、超越的な原理に基づく知識形態に対してカーが批判的視座という共通項を持っていることを論証した（河村 2022a）。

より具体的に述べるとするならば、それらの共通点とは、カーが人間の思想と知識の仮設性を指摘し、善悪の普遍性に疑義を呈したことであると言える。

ドストエフスキーの人生と彼の作品との邂逅により、カーを育んだ西欧で一般的に確信されているような価値観は絶対的なものではないことにカーは気づいた（カー 2002）。すなわち、普遍的な良否は存在せず、善悪は絶対的なものではないとカーは考え始めた。

このような絶対的な善悪に対する疑義は、『危機の二十年』におけるドイツに対する理解のあるカーの姿勢と共通していることを指摘し、カーが超越的かつ絶対的な知識形態に初めて疑義を抱いた過程を、河村 2022a では示した（河村 2022a）。

続いて河村 2022b では、カーの考えるところの、人間の思考と知の超越性に対する疑義をさらに掘り下げた。その稿においては、浪漫的知識人たちが、「普遍的な愛」と

謳われるものに対する理想を追えば追うほどに、その理想と現実の乖離に悲劇的に翻弄されていくというカーの描写を詳細に分析した。

それにより、理想とされていることも、決して絶対的なものではないというカーの視点を明らかにした。

『浪漫的亡命者たち』(1933)からも、『ドストエフスキー』の研究過程においてカーが衝撃を受けた、理想と現実という二元性の重要性に関する論述が『浪漫的亡命者たち』本文中に多々認められた。その結果、この論文でも、やはり結果として、超越的な原理に基づく知識形態に対するカーの批判的視座を明らかにすることとなった(河村 2022b)。

そして、河村 2023a においては、伝記作品『カール・マルクス』(1934)を研究した。『資本論』における、マルクス議論を検討したカーが、マルクスの知的営為とその思想が、特定の時代や地域の産物であるという指摘を明らかにしていることを主張した。

したがって、当該論文は、人間の思考と知識とは、超越的な性質を有していないと、カーが考えていたことを明らかにした。それにより、河村 2023a は、時代や場所を越えて普遍的な、換言すると超越的な原理に基づく知識形態に対するカーの批判的視座を示した(河村 2023a)。

河村 2023 b においては、バクーニンの思想的特徴の一面として、個人主義、絶対主義、独裁を強調している。そしてカーはこれを思想的な「混乱」と評していることを指摘した (Carr 1937, p.438 : カー 2013, 592 頁 : 河村 2023 b)。

カー著『バクーニン』(1937)の翻訳者であり、「訳者あとがき」をその巻末に寄せている大沢正道はこのようなカーのバクーニン観を「あまりに常識的、露骨に言えばあまりに通俗的である」と評している(大沢 2013, 691 頁)。

そして、カーのバクーニン観が「あまりに常識ないしは通俗に落ち込んだ第一歩」として、バクーニンが多大なる影響を受けたとカーが主張するスティルナーをカーが「極端な観念論者で個人主義者」と解釈したことに起因すると大沢は主張する(大沢 2013, 691 頁)。

大沢によるとスティルナーは「無政府個人主義」の元祖とみなされることが通説となっている。そのため、カーもそれに従ったのであろうと大沢は推察している(大沢 2013, 691 頁)。

また、スティルナーの個人主義とは、ニーチェ的なニヒリズムと同意語であると大沢は主張する。

しかし、ここで想起されなければならないことが、まさにそのニヒリズムこそが、カーが最も忌み嫌った 1930 年代のイギリスに蔓延した精神であった。このことは、西村 2012 において詳述されている(西村 2012)。

そして、カーがイギリスに浸透しているニヒリズムを打破したいと望んだ理由につい

て、ラウアー (Michael Lauer) はカーが「イギリス人の心」のダイナミズムの欠如を確信していたためであると主張している (Lauer 2005)。ラウアーによると、カーは永久に動き続ける世界という感覚をイギリス人は喪失しており、恐怖とおぼろげなノスタルジアだけに根差した「特異な盲目」に陥っていたと考えていたという (Lauer 2005)。

これは、ダイナミズムの欠如についてのカーの批判であることは明らかである。つまり二重性と二元性の対極ある一元的な静的状態に 1930 年代のイギリスが陥っていること、そしてそれをニヒリズムの流布としてカーが解釈していたことの証左である。

したがって、大沢によるスティルナーの「個人主義」の解釈が妥当であれ否であれ、カーがバクーニンの思想に、二重性や二元性を見出せず、一元的で静的な性質である超越的な原理に基づく知識形態に批判的であったことに変わりはないといえることを河村 2023b は主張した (河村 2023b)。

以上の研究により、拙稿四論文では 1930 年代のカーの五作品である『ドストエフスキー』、『浪漫的亡命者たち』、『カール・マルクス』、『バクーニン』、『危機の二十年』には共通して、超越的な原理に基づく知識形態に対してカーが批判的であったことを明らかにしている²。

本稿から始まる一連の研究では、以上の拙稿四論文の研究結果を踏まえて、カーは知、すなわち人間の理性が拠り所にする知というものには限界があるため、人間の理性とは可謬的であると考えたのではないかということを検討していきたい。

以上、先行研究の検討と本稿の問題意識を論じた。このような問題関心の下に、以下の章からは、ドストエフスキーというカーにとっての恩師の理想とその理想の根幹をなす理性の限界を、カーの評価を追いながらテキストに従い分析していく。

そのために、ドストエフスキーが理想とするロシア民衆、とくにロシア民衆の宗教観についてのドストエフスキーが考えた理想と実際の様態という現実の乖離について、カーの指摘と評価を追うことにより、カーがドストエフスキーの理性の限界を明瞭にしていることを論じていく。

II. ドストエフスキーと「ロシア民衆」

² カーは、1937 年 1 月に『ヴェルサイユ平和条約以降の国際関係』を出版している。しかし、これは、労働者の社会人や中等学校生などを対象とした「初歩的で、五万字以下の」とカー自身が述べている短いテキストブックであるために (ハスラム 2007、95 頁)、本稿ならびに、関連する拙稿では研究対象外とする。また、1939 年には『危機の二十年』刊行後に『イギリス最近の外交政策』がカーにより書かれているが、本稿と関連する拙稿では伝記作品群と『危機の二十年』との関係に注目しているため、1930 年代の作品ではあるものの、その書籍を研究対象としてない。

本章では、ドストエフスキーの理性の限界として、カーが辛辣な評価を下している、ドストエフスキーの「ロシアと西欧」論の起源をなし、その前提となっているドストエフスキーによる「ロシア民衆の神格化」についてのカーの描写をテキストに従い分析していく³。

カーが最終的に下す、ドストエフスキーの「ロシアと西欧」論に対する厳しい批評は、実に、この「ロシア民衆の神格化」における議論の矛盾点にも関係していると言えるであろう。

1876 年から 1877 年にかけて、ドストエフスキーは『作家の日記』という名のもとに、社会的、政治的論評を行った。『作家の日記』はもともと雑誌『市民』に掲載されたものであったが、それはかなりの好評を博したので、独立雑誌の形式を以て発行されることとなった (266 : 253)。その発行部数は第一年目には四千冊に迫り、第二年目には六千冊にまで達したということから、この評論の影響力はそこそこのものであったと考えてよいのではないだろうか (266 : 253)。

カーは、『作家の日記』を次のように評価している。

むかし『時代』や『世紀』に載せた雑文と同じく、『作家の日記』もまたドストエフスキーの時評的著作に属するもので、後世にとっては大した興味はない (266-267 : 253)。

実際には、イギリス人のカーと同様に、ロシア人と国籍を異にする日本人の筆者からみると、『作家の日記』は、1870 年代のロシアの様々な事件、時事問題を知ることができ、さらにそれらに対するドストエフスキーの見解が、示されている非常に興味深い作品である。ドストエフスキーの見解が妥当か否かはまた別個の問題であり、その根拠のない半ば非合理的にさえ思えるドストエフスキーの評論すら楽しめる作品といえる。

しかしながら、上述の引用の通り、カーはドストエフスキーの時評自体には後世にとって、価値は少ないことを示唆している。それにもかかわらず、カーは著作『ドストエフスキー』中、第十九章という一章を割り当て、ドストエフスキーの抱いた理想について、詳細な分析を行っている。

このことから導き出されることは、カーの関心が、彼が多くの思想的影響を負うドストエフスキーの理想でさえも、それは時代と地域の文脈に限定されており、可謬的かつ仮設的な思想である事実にあるといえまいか。

³ 本章以降において、これ以降、著作名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している個所は、『ドストエフスキー』のページ数であり、括弧内の前半が原著のページ数、後半が邦訳のページ数を意味する。

カーは『作家の日記』において、中心的かつ絶えず反復されている第一のテーマとは「民衆」の理想化であると指摘している（265：253）。カーによるドストエフスキーの民衆の理想化とは、次のようなものであった。

ドストエフスキーは『作家の日記』のほとんど各頁で民衆を中産階級より優れたもののように書いているが、これは自分が徹底的に知り尽くし、また自分自身属していた階級をけなして、何も知っていない階級を理想化しているのである（268：254）。

つまり、ドストエフスキーは自分が属すがゆえに知り尽くした階級ではない、民衆のみを「希望」とであるとみなしているとカーは指摘している。カーは、ドストエフスキーの民衆の理想化は、まさに民衆それ自体との「接触の欠如」に起因していると指摘する（268：255）。そして、このドストエフスキーの観念をカーは別の箇所では「思想の混乱」と一蹴している（268：255）。確かに、『作家の日記』を読んだ限り、ドストエフスキーはごく数人の民衆と個人的に接したことがあったに過ぎない。しかし、ドストエフスキーは、それら数人の民衆との思い出を非常に大切にしていることがうかがえる。したがって、カーによるドストエフスキーと民衆のあいだに接触の欠如があったという指摘は妥当に思われる。

また、カーはドストエフスキーの民衆の理想化に対する批評家ロザノフの一説を引用し、それに賛同している。

「我が国の文学全体を通じて」と批評家ロザノフは書いた、「この理想が現状からこれほど遊離した作家はいなかった」。これは完全に正しい批評であり、手放しの礼賛者がドストエフスキーの政治的眼識をたたえて書いた多くの感想に対する欠くべからざる解毒剤である（268：254）。

以上のように、カーはロザノフの批評を支持しつつ、ドストエフスキーの民衆の理想化を批判的に評価している。確かに、他のロシア文学者によるこのような民衆に対する絶対的礼讃の例を思い浮かべることは難しく、このカーとロザノフの批評は正鵠を射ている。

カーが指摘するように、本稿筆者も『作家の日記』を読む限り、ドストエフスキーは、この民衆に対する信念の根拠をどこにも語ってはいないことを確認した。しかし、カーはこの信念は、二つの体験から生じているという。

第一は、ドストエフスキーが政治犯として流刑されたシベリア時代の経験であり、そこで初めて知った民衆の姿である。

そして、第二には、スラヴ主義への傾倒であるとカーは解釈している（267：254）。さらに、民衆と知識人（インテリゲンチヤ）との間の乖離を、ドストエフスキーが宗教問題に帰着させたことを、カーは問題視している（269：255）。

すなわち、この民衆の理想化というドストエフスキーの視座において、カーが最も注目するのは、ドストエフスキーによる、ロシア民衆とロシアのインテリゲンチヤの分裂と相互理解の欠如という主張であり、その原因をドストエフスキーが宗教に求めたことにある。

ロシア民衆とロシアのインテリゲンチヤの分裂は事実として存在したことをカーは認めつつ、カーはたえドストエフスキーほどにこの点を強調した者が他にいなかったとしても、それはドストエフスキーによってはじめて主張されたことではないと論じている（269:255）。

そのうえで、カーが問題視しているのは、上述のように、ドストエフスキーがそれを宗教問題として、省察を加えたことであった。

カーはドストエフスキーが「その病根の診断と療法では完全に失敗した」と評している（269：255）。

その理由をカーは以下のように説明している。

彼はこの問題を宗教問題に帰着させた。インテリゲンチヤが宗教を捨てて民主主義や功利主義や経済的唯物論に走ったため、彼ら自身の民衆からの離反を極点までに押し進めたのだ、と彼は信ずる。療法は、インテリゲンチヤがみな一斉に同じ方法によって宗教と民衆へ復帰することである（269：255-256）。

このようにして、ドストエフスキーの著作『悪霊』において暗示され、『作家の日記』によって完全に発展したように、ドストエフスキーは民衆と宗教を同一化したことをカーは指摘する。そして、カーはインテリゲンチヤと民衆との離反をやはり宗教的見地から論じている人物の議論をドストエフスキーの主張と対比させることにより、ドストエフスキーが描いた民衆像とその実態の乖離を指摘している。

対照されているその人物とはパーヴェル・ミリュコフという著作家である。カーは、ミリュコフを「その鋭さにおいてはるかに優れた観察者、非常にかけ離れた見解持ち主」として、ドストエフスキーと対照しながら紹介している（270：256）。

カーはミリュコフを次のように評価している。

ドストエフスキーの方は、教会を離れることによって、民衆からも離れてしまったインテリゲンチヤを非難しているのに反して、約三十年後に筆を採ったミリュコフの方は、民衆もインテリゲンチヤ同様、公認の宗教には、その本心では無関心

であることを見抜くだけの洞察力をそなえていた。ロシアでは、教会が西欧の場合のようにインテリゲンチヤと民衆の双方に共通の伝統と文化を供給できなかったが、ミリュコフは両者の分裂の原因はここに由来するとみている（270：256）。

すなわち、ドストエフスキーと同様に、民衆とインテリゲンチヤとの乖離を、宗教的問題にみすえながらも、ミリュコフは民衆もまた公認の宗教には本心では無関心であるという現実の実態の分析がきちんとなされていることをカーは指摘している。

ミリュコフとドストエフスキーとを比較検討したのち、カーはドストエフスキーが『作家の日記』を通じて最も強く主張を繰り返した彼の理想の第一である民衆とインテリゲンチヤの統合について、以下のような評価を下している。

ドストエフスキーの診断は誤っており、その療法に至っては無意味である（270：256）。

これは、ドストエフスキーに対するきわめて、強い論難である。そして、カーは彼のドストエフスキーに対する評価が説明する必要もないほど、自明の理であるとあるといわんばかりに、その評価の理由を全く話していない。カーがそれを記す必要がないという明確な意図を表現していることを読者は明らかに読み取ることができる（256）。

このように、カーはドストエフスキーの小説には、多くの共感と影響を受けていたにもかかわらず、ドストエフスキーの理性に基づく理想への処方に対しては、その限界を辛辣なまでに論じている。なぜなら、ドストエフスキーは理想と実態を比較検討することなく、現実の分析を行わないままに議論を進め、あるべき様態、ありたいと考える様態にしか言及していない。ここに、カーはドストエフスキーの理想の基軸となる理性の限界と可謬的傾向を指摘している。

理性の誤謬に対するカーの批評は、冷徹なほど厳しい。カーはもちろん『作家の日記』における時事問題について、彼なりの正誤を追求したのかもしれない。しかし、それ以上に、ドストエフスキーの理性に対する厳しい論難が展開されている。

この章の冒頭において、カーが『作家の日記』を「後世にとってたいした興味はない」とやや独断的に断じていることから、ドストエフスキーの理性的著述は、時代とその場所に制約されており、限界があることを示唆していると捉えることができる。

以上、本章では、ドストエフスキーの社会的かつ政治的論評である『作家の日記』の第一のテーマである「ロシア民衆」に対するカーの厳しい評価をカー著『ドストエフスキー』第十九章のテキストに従い、追っていくことにより、カーがドストエフスキーの理性に対して、その誤謬を示唆することによって、その限界を指摘し、ドストエフスキーほどの人物の理性も可謬的性質を有すると、論じていることを検討した。

以下からは、ドストエフスキー著『作家の日記』における第二のテーマ、「ロシアと西欧」について、カーのドストエフスキーの思索に対する評価をテキスト分析していくことにより、本章と同様に、カーが人間の理性とは可謬的性質を有し、理性を無条件に過信することへの危惧を著していることを検討していく。

Ⅲ. ドストエフスキーと「ロシアと西欧」

前章においては、『作家の日記』の中で、中心的位置を占めていた第一のテーマである「民衆礼讃」について検討した。本章では、『作家の日記』において「ドストエフスキーの心にとって、これに劣らぬほどの親近なテーマ」であるとカーが解釈した「ロシアと西欧」というテーマについて検討していく。その過程で、ドストエフスキーの理性の可謬性をカーが指摘している箇所を綿密にテキスト分析していくことにより、カーの人間の理性に対する姿勢を考察していきたい。

ドストエフスキーに限らず、たいていの他のロシア作家にも共通して、「ロシアとヨーロッパ、この両者の永遠の対照」が行われているとカーは主張する（270：256）。

カーは、ドストエフスキーが1862年の最初のヨーロッパ旅行に際し、すでに「西欧文明は個人を基礎として、自我の自己主張に基づいて樹立されていることに」気づいたと主張している（270：256-257）。これは、カーも指摘しているように何も独創的な発見とは言えないことは明らかである。

このことを示すために、カーはクリジャーニチという最も古いスラヴ人政治理論家の、十七世紀末の文章を引用している。

ヨーロッパ人は享樂を人間の最高の目的と考える……そしてキリストの福音を享樂の福音へと歪曲する（270：257）。

すなわち、ドストエフスキーの時代は、J・S・ミルや功利主義者、さらには自由放任経済学説の全盛期であったことをカーは示唆しており、クリジャーニチの主張を妥当なものとみなしている。この点に関して、特に異議はみられないであろう。

カーはヨーロッパ文明とロシア文明のロシア人による対照のうち「より疑問視されねばならぬ面」として、「ロシア文明は自我主義の痕跡をとどめないものであり、四海同胞の観念に基づいている」という点を指摘している（270：257）。この視点は、カーによるとスラヴ主義者の「おきまり」である信念であったという。このスラヴ主義に基づきカーは、やや乱暴に、しかし、かなり適切にドストエフスキーの思考の方程式というものをもとめているので、以下に記してみたい。

ドストエフスキーの倫理的・宗教的・国家的信条の究極の方程式は、次のようなものであった。すなわち、一方では—エゴイズム＝カトリシズム＝キリスト教の敵＝ヨーロッパ、他方ではまた—同胞愛＝正統的信仰＝キリスト＝ロシア (271:257)。

カーが、この「方程式」を「奇妙ではあるが熱烈に支持された信仰」とであると評していることは、興味深い (271:257)。西欧人や東洋人からすると、奇妙な方程式であることは確かに言うまでもないが、ロシアでは、さらに厳密にいうならばドストエフスキーにはそれが真実であった様子が『作家の日記』のいたるところから明らかである。

カーによると、ドストエフスキーがこの「信仰」を確立する際に最も影響を受けたのが、評論家ダニレフスキーが昔、書いた政治論文であった。カーはダニレフスキーとドストエフスキーの見解の発展の類似性を、両者がたどった経歴と交えながら述べている。

第一に、彼とドストエフスキーは知り合いで、ダニレフスキーもまた政治犯として捉えられた過去を持つ。

第二に、ドストエフスキーが外国滞在中であった 1869 年、彼の『永遠の夫』を雑誌『曙』に掲載したところ、やはりこの同じ雑誌にダニレフスキーは『ロシアとヨーロッパ』と題する連載論説を発表していた (271:257)。そして、ドストエフスキーは、間違いなくダニレフスキーの論説を読んだであろうこと、そして、その議論こそがドストエフスキーの信仰となったことをカーは次のように述べている。

この雑誌で、ドストエフスキーはきっとこれを読んだに違いない。この論説はロシア人の思想に大きな感銘を与え、スラヴ主義者に対しては特にそうだった。そして、これが、ドストエフスキーがこの問題についてのちに書いたほとんど一切の基礎をなした (271:257)。

ドストエフスキーがスラヴ主義者に感銘を与えたダニレフスキーの論考を読んだに違いないという、カーの推論は特に非常に的外れとは考えにくい。また、ダニレフスキーの議論を以下に検討してみると、カーのこの解釈が妥当であることが明白となってくる。

よって以下では紙幅を少し割いて、ダニレフスキーの議論を検討してみることににより、カーのドストエフスキーの理性に対する評価の妥当性を裏付けると同時に、ドストエフスキーの「信仰」をより深く掘り下げていくこととする。

五十年後に、『西欧の没落』を世に問うた、かのドイツの思想家であるシュペングラーが宣言した思想を、ダニレフスキーはすでに「予告」していた (271:258)。

ダニレフスキーは、「ゲルマン＝ラテン文明はギリシアおよびローマの古代文明と同じ周期をたどりつつ十六、七世紀にその精神的頂点に達し、十九世紀にはその物質的頂

点に達した」と明確に宣言している（271：258）。

この文明は今や魂の久しく死滅した肉体に過ぎない。そしてその前途には不快な解体過程が残されているばかりだ（271-272：258）。

このように、ダニレフスキーは西欧がこれ以降「没落」していく運命にあることを宣言している。彼はさらに続けている。

西欧文明は今やまったく物理的であり、動物的力の上に築かれている。ロシア文明においてのみ精神力がなお支配している。文明の比較は国民性の比較と結びついている。利己的な個人主義的な西欧人に比べると、スラヴ人の性格は、「やさしさと従順と経緯に充ちて、暴力を知らず、キリスト教的理想に申し分なく一致している」。ヨーロッパ人においては個人的性質が、スラヴ人においては社会性質が優勢である（272：258）。

すなわち、ダニレフスキーはスラヴ人の西欧人に対する精神的優越性を強調しているのである。さらに、このような事実は、次のような現象を導いているとダニレフスキーは主張する。

フランス人やイギリス人はその国籍を失ってもなお立派な個人でありうるのに、ロシア人がその国籍を失くし、また西欧化された場合には「下らぬボロ切れ」同然となることであろう。西欧人はその国民としての立場、または社会上の立場を失くしても自らの個性を頼みの綱とするのに、ロシア人はそうなると元も子も失くしてしまう（272：258）。

このように、ダニレフスキーは、もしロシア人が国家を失くしてしまえば、個人として到底存在できないと主張するのである。

以上の議論は、ダニレフスキーが十九世紀半ばに世に問うた、彼の理性の結晶であるということができるであろう。しかし、カーは、ダニレフスキーの議論を下記のように冷徹な一文により一蹴している。

かかる説はおそらく真剣に批評する価値もないだろう（272：258）。

このように、ダニレフスキーの議論を論難する理由をカーは以下に展開していく。カー曰く、ダニレフスキーがロシア人に見出した個人主義の欠如は、永続的な国民的伝統

の欠如に主として由来するものであることは当然指摘されるべきである（272：258）。

十九世紀のロシア人が容易に融合できた理由として、カーは自らの顕著な国民性というものをまだ創出していなかったためであると主張している。そして、この事実こそが西欧人がロシア人の国民性を検討した際に導き出した見解であり、西欧的理性からの解答である。

しかし、すでに、ダニレフスキーによって理想化を推し進められたこの「国民性」は、「ドストエフスキーによって、ロシア民衆の至上の特徴的な美德」と称揚された（272：258）。ドストエフスキーは以下のように述べている。

ロシア人のみが、偏狭なヨーロッパ人を理解し、同化し、教えることのできる「全人」だ（272：258）。（中略）ロシア人は自らをヨーロッパ化してはならない。ロシア人は超ヨーロッパ人であり、ヨーロッパの教師であって、かつ、いつまでもそうではなくてはならぬ（272-273：259）。

カーは、以上のようなスラヴ主義的思想に対して、次のように述べている。

こういう考え方は西欧人の頭には幾分突拍子もなく思えるかもしれない。しかし、多くのことが根本的に変革された今日でも、やはりロシア国民の心理にはこの考え方が根強く残っている（273：259）。

このように、ロシアと西欧という文化とそれを培う場の差異により、人間の理性とその理性を基盤とする理想や常識がいかにかけ離れたものに成りえるかをカーはこの『ドストエフスキー』第十九章では繰り返し表現している。

ここまで、ダニレフスキーの論文の内容を検討しながら、その議論に立脚したドストエフスキーの「信仰」について、ロシア人の性格やヨーロッパの文明におけるロシア人の役割等に関して、抽象的見地から考察してきた。

しかし、ダニレフスキーもドストエフスキーも、上述のような「抽象的思考」に満足していたわけではなかったとカーは述べる（273：259）。カーは次のように論じている。

彼らは国際政治の泥沼へと大胆に飛び込んで、当時のロシア帝国政府の愛国的野望と合致するよう彼らの説を実際に適用しようとして、自ら混乱と自己矛盾との迷路にはまり込んだ（273：259）。

上述の「暴力を知らず、キリスト教的理想に申し分なく一致している」ロシア人と実際の国際政治の中でのロシア人の実態の乖離をカーは、指摘している。四海同胞の非暴

力的なロシア人が、実際にはどのような理想をもち、言論を展開していたかをカーの言説に従って、以下に検討していく。

第一に、ダニレフスキーの矛盾は、ピョートル大帝に対する評価にあることをカーは示唆している。ダニレフスキーは、その前提から、当然ピョートル大帝を国内における社会的、政治的改革を当然非難する立場にあるのだが、国外における軍事的功績には、彼はピョートル大帝に惜しみない賛辞を送り、かつ賞賛していることをカーは指摘している（273：259）。

改革者ピョートルは、ロシア民衆とその四海同胞の理想のためには、あくまで悪者である。ところが征服者ピョートルは、およそあらゆる四海同胞主義に反して国民的英雄となる。（中略）そしてダニレフスキーは、後のドストエフスキーと同様、後ろめたい人間のしつこさで、ロシアが帝国主義的国家であることを繰り返して烈しく否定する（273：259）。

このように、カーはダニレフスキーの矛盾を指摘することによって、ダニレフスキーとドストエフスキーの理性の可謬性を、皮肉交じりに指摘している。

1876年と1877年の『作家の日記』が執筆され、発表された時代背景をここで鑑みることは、こののちに続く、さらに熱を帯びたドストエフスキーの主張を理解する上で有益となるであろう。

当時は、ロシアが隷属化されたバルカン半島のスラヴ諸民族の擁護兼開放をロシアが初めて担った時期であった。さらには、トルコ人をヨーロッパから追放して、コンスタンチノーブルに追い込もうとしていた時期でもあった。

1875年にはヘルツェコビナとモンテネグロにおけるトルコの支配に対する反乱が、その翌年である1876年にはブルガリアに叛乱が起きた。カーによると「ロシア人の愛国心は、同じスラヴ族であり同じキリスト教徒である被圧迫民族の味方としてすっかり沸き立った」という（260）。

1877年には、世論により、アレクサンドル二世はトルコに対して宣戦し、当初の旗色はロシア軍にとっては良かった。

『作家の日記』は、「それゆえに、勝ち戦で白熱化した汎スラヴ的興奮と好戦的感情の雰囲気の中で書かれた」とカーは記している（274：260）。

そして、愛国的感情はロシアの政策に対する、ほぼすべての他の列強からの露骨な反対によってますます激化された。それゆえ、大英帝国、またフランスに対する「痛罵」がロシアの新聞上を埋め尽くした（274：260）。

以下の『作家の日記』の個所は、この時代背景のうちに読まれ、理解されなければならないことをカーは主張している（274：260）。

これより、カーが意図して、『作家の日記』から引用している長いドストエフスキーの記述を、本稿でもあえて引用していくこととする。なぜなら、この箇所には、上述のような時代背景の下で、ドストエフスキーの理性がいかに脆弱で可謬的な性質を有しているかがよく表れている部分であるからである。カーも、それがゆえに、比較的多くの紙幅を割いてまで、『作家の日記』の論述を引用したのであると思われるためである。

われわれはわれわれ自身のために戦争を必要とする。われわれは、トルコ人に苦しめられている同じスラヴ民族のためばかりでなく、われら自身の救済のために立ち上がっているのだ。戦争は、われわれが呼吸する空気を、われわれが手のつけようもない腐敗と精神的窒息の中にこのように坐して、息も詰まりそうになっているこの空気を、きっと洗い清めてくれるだろう（274：260）。

すなわち、抽象的な議論において強調されていたロシア人の非暴力的性質、四海同胞の精神などはすべて忘却されていることをカーは強調している。理性というものは、おかれた時代背景や支配的な世論によって、簡単に可変するのであることをカーは強調している。この引用からは、確かに、ドストエフスキーの理性に矛盾があることがうかがえ、カーの主張は正当であると思われる。

次のカーによる『作家の日記』からの引用も、やはり、スラヴ主義というドストエフスキーの理性の結晶である理想が、いかに仮設的で可謬的な性質を有しているかを証明するものである。

社会が不健康で病に侵されておれば、長期的な平和というような結構なものでも、社会にとって有益とはならず有害となるものである。ヨーロッパの歴史において、われわれの記憶に残る時以来、戦争なしに住んだ時代などというものは一つもない。そして、それにはまたその理由がある。明らかに戦争はある目的のために必要であり、健康性を保つものであり、人間の心をせいせいさせるものである（274-275：260-261）。

このように、ドストエフスキーは、「やさしさと従順と経緯に充ちて、暴力を知らず、キリスト教的理想に申し分なく一致している」ロシア人と彼が定義したロシア人とはかけ離れた記述を堂々と記していることをカーは指摘している。カーによる痛烈な皮肉交じりの批判と言え、この批判は妥当である。

続いてカーは、以下の引用を記している。

おそらくわれわれではなく、我々の子供たちが英国の最後を目にすることである

う。(中略) ポーランドと同じ運命がフランスを待ちかまえているのであり、この国は政治的には存在しなくなるだろう (275 : 261)。

この引用文はカーも指摘しているように、英国とフランスへの威嚇で終わっており、ドストエフスキーは「ヨーロッパ戦争を予告する」ことに何らの躊躇も感じていなかったとカーは指摘する。抽象的なロシア人民衆の平和的精神と清らかさとの大いなる矛盾をカーは衝いている。

以下に記すカーが最後に記載している引用をカーは「絶叫」と呼んでいる。いかなるものか、少し長い引用ではあるが、カーの意図をくみ取りその重要性を鑑みたうえで、検討してみよう。

戦争が一たんはじまれば、ただちにそれは全ヨーロッパ戦争となる。東方問題と東方戦争とは宿命的に全ヨーロッパ戦争へと落ち込んでゆく……この宿命的な闘争の最も肝要な要素は次の事実に存する、すなわち、それが千年の古きにわたるローマ・カトリック教の問題を解決して、これに代わって復活した東方のキリスト教が勃興するだろう……私は確信する、戦争は東の同盟軍に有利な終わりをつげるであろう、当方の戦争が全ヨーロッパ戦争に突入すればロシアは何ら恐れることは無い、そしてそういう解決を見た方が好都合だとさえいえるだろう。もちろん、そうならばおそろしいことだ、尊い人間の血がおびただしく流されるのだ！しかし、この流血がヨーロッパを救うことになると思えば、とにかくそこに慰めはある—— (275 : 261)。

ここでカーによるドストエフスキーの引用は終わっている。カーは一言「この引用を続ける必要はない」という一文から、次の章を書き始めている。カーによる上記の『作家の日記』に対する評価は、苛酷なものである。

この引用を続ける必要はない。こういう絶叫は、共産主義の脅威からヨーロッパを救うためにロシアがヨーロッパ援助にかけつけるという、ドストエフスキーが別の章で描き出している夢想と同様哀れを誘うと言いたいくらいだ。これほど偉大な芸術家が主戦論的ジャーナリズムにそのペンを奉仕させたというのは後世から見れば痛ましくもあり信じがたいことでもあろう (275 : 261)。

ドストエフスキーは芸術家としてではなく、教師兼預言者として、いよいよ彼自身をみなすようになったとカーは指摘する一方、『作家の日記』が全く後世にとっては問題にもならない著作であるという評価をもしドストエフスキーが知ったなら、彼は非常に

驚くであろうと皮肉を述べている（275：261）。

以上のように、本章においては、ドストエフスキーが著述家ダニレフスキーの政治的論文に影響を受け、打ち立てたスラヴ主義の信念を、カーのテキストを綿密に追うことによって検討し、ドストエフスキーの理性的矛盾をあらわにすることにより、理想と実態の乖離を分析することなしには理想は夢想でしかないというカーの主張を追ってきた。それにより、カーによる人間の理性は可謬的性質を有するという視座を明白にしてきた。

以下には、結びとして結語を著し、本稿を総括しつつ今後の課題を提示していく。

結語

本稿は、E・H・カーの1930年代の思想において、人間の理性の可謬的性質こそが、この時期に一貫して、肯定的に擁護されてきた視点であることを明らかにすることを目的とし、その第一段階目として、1931年に出版されたカーの処女作『ドストエフスキー』のテキスト分析を行った。

この、人間の理性は可謬的性質を有するというカーの視点は、彼がロシア人知識人たちを中心とする伝記作品を執筆する過程の研究で認識した、人間の理性に対する過信への危惧を起源としている。そして、カーのこの、初期思想形成期における人間の理性に対する慎重な姿勢とその可謬的性質の認識こそが、1930年代を通じたカーに、「理想と現実の並置」の必要性を認識させ、両者を相対的に検討することこそ、カーの哲学であったと本稿筆者は仮定する。

既述のように、拙稿河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023bにおいては、カーの1930年代の知的営為に一貫する否定的かつ批判的視座とは、超越的な原理に基づく知識形態であったことを明らかにした。

本稿は、逆説的にカーが1930年代に肯定的に擁護したものについての研究である。そして、本稿は上記の拙稿四論文の続編に該当する。さらには、上述のように、カーが擁護したものこそ、人間の理性の可謬的性質であるということを明らかにした。

ユートピアニズムの根幹をなす合理主義的な理想とは理性の産物である。理性とは時代と場所に制約された人間の思想にすぎず可謬的である。可変的かつ仮設的であり、誤謬をはらむ理性の産物としての理想であるユートピアニズムは、したがって即物的現実によって対照されなければ、現実と乖離した夢想と化すことをカーは見出した。

本稿では、カーのユートピアニズムとリアリズムに関する議論、また、それらとカーが認識した人間の理性の可謬性の関係性については、紙幅の関係から、あえて詳述しなかった。そして、その前段階として、いかに、カーが人間の理性に限界を発見していったかを、ロシア人知識人たちを中心とする伝記作品の主人公の思考、より厳密にいえば

主人公らの理性の限界をカーのテキストに沿って明らかにした。

今後の課題の一端としては、次のような問題が挙げられる。

第一に、1930年代に著された、カーの他の著作、すなわち、『浪漫的亡命者たち』、『カール・マルクス』、『バクーニン』、そして『危機の二十年』においても、同様にカーは人間の可謬的性質を認識し、表現しているのであろうか。この研究は、本稿筆者の仮説を立証するために極めて興味深いものである。

第二に、ユートピアニズムとリアリズムについての最新の議論を総括した研究が必要とされていることは明白である。

第三に、そのユートピアニズムとリアリズムの議論と、人間の理性についてのカーの思索についての関係性を検討した、詳細かつ綿密な研究がなされなければならない。

そして、この第一から第三の課題が明らかにされたのち、カーの思想とは、実はこれまで批判されてきたように、相対主義に飲み込まれ、確固たる普遍的な理論を構築しえなかったゆえに失敗したのであるか否かが、再度検討に付されなければならないのではないだろうか。

最後に、故・山中仁美は、国際政治学と歴史哲学、そしてソビエト・ロシア史の巨匠である「三人のカーから一人のカー」というテーマに大変関心を持ち、研究を進めてこられたが、「文学」の領域を含めた「四人のカーから一人のカー」へと発想を転換すると、いまだ存在していない見地からのカー像を導き得ることも、少しずつ明らかになってきているように思われる。「四人のカーから一人のカー」の視角は、将来的にはカー研究にとって、その発展をさらに推し進めるものとなるのではないだろうか。

参考文献

一次文献

- Carr, E.H. (1931) *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, Allen & Unwin (松村達雄訳『ドストエフスキー』筑摩書房、1968年)。
—(1933) *The Romantic Exiles : A Nineteenth-Century Portrait Gallery*, Victor Gallancz (酒井只男訳『浪漫的亡命者たち』筑摩書房、1953年)。
—(1934) *Karl Marx: A Study in Fanaticism*, London, J. M. Dent & Sons

- (石上良平訳『カール・マルクス』未来社、1956年)。
- (1937) *Michael Bakunin*, London, Macmillan
(大沢正道訳『バクーニン 上・下』現代思潮社、2013年)。
- (1939) *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan (原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、2011年)。
- (2000) “An Autobiography”, in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, London, Palgrave, pp. xiii-xxii (中嶋毅訳「自伝的覚書」『思想』944、2002年)。
- Karl, M. (1867) *Das Kapital*, Hamburg, Verlag von Otto Meisner (日本共産党中央委員会社会科学研究所監修『新版 資本論』新日本出版社、2019年)。
- Dostoevsky, F. (1877, 1880, 1881) *Dnevnik pisatelya, (A Writer's Diary, translated from Russian to English*, Northwestern University Press)(米川正夫訳『作家の日記』上下巻、河出書房新社、1970年)。

二次文献

- Ashworth, L. M. 1999. *Creating International Studies; Angell, Mitrany and the Liberal Tradition*, Ashgate.
- Ashworth, L. M. 2002. “Did the Realist-Idealist Great Debate Really Happened? A Revisionist History of International Relations,” *International Relations* 16 (April), pp.33-51.
- Ashworth, L. M. 2006. “Where Are the Idealists in Interwar International Relations?” *Review of International Studies* 32 (July), pp.291-308.
- Booth, Ken. 1991. “Security in Anarchy: Utopian Realism in Theory and Practice,” *International Affairs* 67 (July), pp.527-545.
- Bull, H. 1969. “The Twenty Years' Crisis Thirty Years On”, *International Journal* 24 (Autumn), pp.628.
- Buxton, C.R. 1936. *The Alternative to War: A Programme for Statesmen*, London, Allen & Unwin.
- Cox, M. ed. 2000. *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, 2000.
- Cox, M. 2010. “E. H. Carr and the Crisis of Twentieth- Century Liberalism: Reflections and Lessons,” *Millennium: Journal of International Studies* 38 (May)

pp.523-533.

- Davies, R. W. 2000. "Review Essay, Jonathan Haslam, *The Vice of Integrity: E. H. Carr 1892-1982*," *The Russian Review* 59 (July), pp.442-445.
- Dunne, T. 1998. *Investigating International Society: A History of English School*, Palgrave.
- Dunne, T. 2000. "Theories as Weapons: E. H. Carr and International Relations," in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.217- 233.
- Evans, G. 1975. "E. H. Carr and International Relations," *British Journal of International Studies*, 1 (July), pp77-79.
- Fox, W. T. R. 1985. "E. H. Carr and Political Realism: Vision and Revision," *Review of International Studies* 11(January), pp.1-16.
- Fiott, D. 2010. "Carr's Quest: Escaping the 'Rules' of International Relations?" *ECPR Graduate Conference*, Dublin, Summer 2010.
- Gismondi, M. 2004. "Tragedy, Realism, and Postmodernity: *Kulturpessimismus* in the Theories of Max Weber, E. H. Carr, Hans j. Morgenthau, and Henry Kissinger", *Diplomacy & Statecraft* 15 (September), pp.435-464.
- Guzzini, S. 1998. *Realism in International Relations and International Political Economy: The Continuing Story of a Death Foretold*, Routledge.
- Haslam, J. 1999. *The Vices of Integrity: E. H. Carr, 1892-1982*, Verso.
- Howe, P. 1994. "The Utopian Realism of E. H. Carr," *Review of International Studies* 20 (July), pp.277-297.
- Johnston, W. 1967. "E. H. Carr's Theory of International Relations: A critique," *Journal of Politics* 29 (November), pp.861-884.
- Jones, C. 1998. *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press.
- Lauer, M. (2005) "From a Bookshop in Riga: Edward Hallett Carr's Debt to Fyodor Dostoevsky," A thesis submitted to the Faculty of Graduate Studies and Research in partial fulfilment of the requirements for the degree of Master of Arts, Institute of political Economy, Carleton University, Ottawa, Ontario.
- Mearsheimer, J. J. 2005. "E. H. Carr vs. Idealism: The Battle Rages On", *International Relations* 19 (June), pp.139-152.
- Molloy, S. 2003. "Dialectics and Transformation: Exploring the international Theory of

- E. H. Carr,” *International Journal of Politics, Culture and Society* 17 (Winter), pp.279-306.
- Molloy, S. 2006. *The Hidden History of Realism: A Genealogy of politics*, Palgrave.
- Morgan, R. 1974. “E. H. Carr and the Study of International Relations,” in Chimen Abramsky and Beryl J. Williams (eds.), *Essays in Honour of E. H. Carr*, London, Macmillan, pp.171-180.
- Morgenthau, H. 1948. “The Political Science of E. H. Carr,” *World Politics*, 1(1), pp.127-134.
- Nishimura, K. 2011. “E. H. Carr, Dostoevsky, and the Problem of Irrationality in Modern Europe,” *International Relations* 25 (March), pp.45-64.
- Rich, P. 2000. “E. H. Carr and the Quest for Moral Revolution in International Relations,” in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr, A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.198-216.
- Schmidt, B. C. 1998. *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of International Relations*, SUNY Press.
- Schmidt, B. C. 2002. “On the History and Historiography of International Relations,” in Walter Carlsnaes, Thomas Risse, and Beth A. Simmons (eds.), *Handbook of International Relations*, Sage, pp.3-22.
- Smith, M. 1990. *Realist Thought from Weber to Kissinger: Political Traditions in Foreign Policy Series*, Louisiana State University Press.
- Thompson, K. W. 1980. *Masters of International Thought: Major Twentieth Century Theorists and the World Crisis*, Louisiana State University Press.
- Torbjørn, L. K. 2008. “A Lost Generation? IR Scholarship before World War 1”, *International Politics* 45 (November), pp.650-674.
- Wilson, P. 2000. ‘Carr and his Early Critics: Responses to The Twenty Years’ Crisis’ in Cox ed., *E. H. Carr: A Critical, Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, pp.165-197.
- Wilson, P. 2001. “Radicalism for a Conservative Purpose: The Peculiar Realism of E. H. Carr,” *Millennium: Journal of International Studies* 30 (January), pp.123-136.
- 遠藤誠治 (2003) 『危機の二十年』から国際秩序の再建へ—E. H. カーの国際政治理論の再検討 (帝国・戦争・平和)『思想』第 945 号。
- 遠藤誠治 (2009) 『危機の二十年』の現実主義論』『外交フォーラム』第 22 号 2 巻。
- 岡安聡 (2000) 『利益の自然調和』から『作り出す調和』へ—E・H・カーのユートピア』『青山国際政経大学院紀要』第 12 号。
- 大沢正道 (2013) 「訳者あとがき」E・H・カー著『バクーニソ 下』現代思潮新社：

679－708 頁。

- 勝田吉太郎 (1979) 『人類の知的遺産 49 : バクーニン』講談社。
- 川端末人 (1951) 「国際政治の構想と変革—E.H.カーの国際政治学の紹介」『同志社法学』第 9 号。
- 河村しのぶ (2021a) 「西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』に関する一考察」『総合文化学論輯』第 14 号:1－21 頁。
- 河村しのぶ (2021b) 「E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響」『総合文化学論輯』第 15 号:1－23 頁。
- 河村しのぶ (2022a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として」『総合文化学論輯』第 16 号：85－109 頁。
- 河村しのぶ (2022b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『浪漫的亡命者たち』において」『総合文化学論輯』第 17 号：19－41 頁。
- 河村しのぶ (2023a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記『カール・マルクス』における『資本論』に関するカーの議論を基に」『総合文化学論輯』第 18 号：21－41 頁。
- 河村しのぶ (2023 b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記作品『バクーニン』における静的な一元性に対する批判的考察」『総合文化学論輯』第 19 号：21－40 頁。
- 左近毅 (1973) 「解説」H・M・ピルーモヴァ著『バクーニン伝 下』三一書房：213－255 頁。
- 佐々木隆浩 (2018) 『マルクス 資本論』角川選書。
- 佐藤史郎、三牧聖子、清水耕介編 (2022) 『E・H・カーを読む』ナカニシヤ出版。
- 西村邦行 (2010a) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 1」『法学論叢』第 166 号 5 卷:84－99。
- 西村邦行 (2010b) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 2」『法学論叢』第 167 号 3 卷:18－139。
- 西村邦行 (2010c) 「知識人としての E. H. カー：初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」『国際政治』第 160 号:34－47。
- 西村邦行 (2012) 『国際政治の誕生—E. H. カーと近代の隘路—』昭和堂。
- 西村邦行 (2014) 「第一次大戦から 100 年 E・H・カーから考える第一次大戦と現代」『公明』第 107 号：56－61 頁。
- ハスラム、ジョナサン (2007) 『誠実という悪徳—E.H. カー 1892－1982—』、角

- 田史幸、川口良、中島理暁訳、現代新潮社。
- ピルモヴァ、H・M (1973)『バクーニン伝 上』三一書房。
- ピルモヴァ、H・M (1973)『バクーニン伝 下』三一書房。
- 三牧聖子 (2014) 『戦争違法化運動の時代―「危機の20年」のアメリカ国際関係思想』名古屋大学出版会。
- 森元斎 (2017) 『アナキズム入門』ちくま新書。
- 山口育人 (2019) 「＜書評＞山中仁美・佐々木雄太監訳『戦争と戦争のはざま―E・H・カーと世界大戦―』」『史林』102 (5) : 796-801 頁。
- 山中仁美 (2003) 『E・H・カー研究』の現状の状況をめぐって」『国際関係学研究』第29号:139-147。
- 山中仁美 (2014) 「西村邦行著『国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路』」『国際法外交雑誌』第113号3巻：475-479。
- 山中仁美 (2017) 『戦間期国際政治とE・H・カー』岩波書店。
- 山中仁美 (2017) 『戦争と戦争のはざままで』ナカニシヤ出版。

[E. H. Carr and the fallible nature of human reason (1)—An analysis of Carr's biography , *Dostoevsky*.] .

[KAWAMURA, Shinobu・元九州大学大学院法学府博士後期課程・日本翻訳連盟認定翻訳士、産業翻訳事務所代表・現在の研究テーマ：E・H・カーの国際政治思想]。